ISSN 1345-3580

# Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.2 February 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

2

CONTENTS


- 巻頭言
  海外でのつとめの完成
  ／永尾教昭 …… 1
- 日本語教育と海外伝道（31）
  国際化の中での日本語教育 ②
  ／大内泰夫 …… 2
- イスラームから見た世界（10）
  イスラームと断食①―楽しく厳しいラマダーン―
  ／澤井　真 …… 3
- キルケゴールで読み解く 21 世紀（29）
  生命倫理とキルケゴール―逡巡と規範、逡巡と決断について ―
  ／金子　昭 …… 4
- 伝道と翻訳―受容と変容の“はざま”で―（27）
  仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑩
  ／成田道広 …… 5
- 遺跡からのメッセージ（66）
  大和の文化遺産を学ぶ ④ － 1400 年の歴史を刻む法隆寺
  ／桑原久男 …… 6
- コロンビアへの扉 ―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（14）
  5. コロンビアの体質 5
  ／清水直太郎 …… 7
- ヴァチカン便り（48）
  法王：人は慈悲で救われる
  ／山口英雄 …… 8
- 天理参考館から（23）
  ウシにまつわるお話
  ／幡鎌真理 …… 9
- 思案・試案・私案
  「碍」の字表記問題再考（11）
  ／八木三郎 …… 10
- 2020 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（6）
  第 3 講：88「危ないところを」
  ／岡田正彦 …… 11
- 2020 年度公開教学講座、「教学と現代」の案内 …… 12


巻頭言

## 海外でのつとめの完成

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

天理教の最高祭儀であるつとめの一つの特徴として、非常に人手がかかるということがある。一般の教会でも 9 種類の楽器を奏でる者、6 人のておどりを勤める者、さらに歌を歌う者（地方（じかた））が 3 人で、しかも理想的には 3 交代なので計 54 人が必要となる。地方を 1 人として、交代なしでも最低 16 人である。

ところで天理教教祖中山みきは、文久年間（1861 ～ 64 年）の頃より信者に講を結成することを促すようになる。1867 年作の「みかぐらうた」（つとめの地歌）でも「どうでも信心するならば　講を結ぼやないかいな」（5 下り目 10。漢字混じりは筆者による）と歌っている。

通常、宗教は、教えが拡大していくのに伴い信者たちはその組織化を図り講などが結成される。キリスト教の教会（エクレシア）とは、現在は建物を指すが元々の意味は信者組織、言わば講である。天理教も同様に教会の前身が講であり、それは組織であった。例えば天理教初期の有力講の一つである「斯道会」も、建物はなく仏教寺院を会場として会合を持っていた。[1] やがて講は教会となり、現在教会と言えば組織というよりも建物、拠点を指すようになっている。

教祖が講の結成を促したのは、信者たちの修練と各地での教勢の拡張を意図したものであったと思われるが、同時につとめを完成させるための方策でもあったのではないか。この場合の「完成」とは、歌や踊りが制作され楽器が揃うことではなく、確固たる信仰を持った信者を十分な人数分揃えて勤めることを意味する。上記に述べたように、つとめには非常に人手がかかる。加えて、警察など公権力による激しい迫害もあり、勤める人たちを揃えることは決して容易なことではなかった。しかし、教祖は「おふでさき」（教祖の直筆による和歌体の神言）のなかでも「急き込みも何ゆへなると言うならば　つとめの人衆ほしいことから」（第 2 号 8。同）などと再三再四、つとめを勤修する人間を揃えることを強く要請している。

したがって現在でも天理教では、各教会がつとめを完全な形で勤められるように努力することが、つまりは信仰的成人が進むことを意味する。宗教というのは、キリスト教のミサでも仏教の勤行でもそれを執行することに重要な意義がある。しかし天理教の場合、つとめの執行それ自体も重要だが、それを勤める人たち―単に人数的な意味ではなく、揺るぎない信仰信念を持った人たち―を揃えることにも意義があると考える。これは天理教の一つの特徴だろう。

海外においても、まったく同様である。したがって、布教師たちは、当然ながら一日も早く、完全な形でつとめが勤められることを目指す。そのために、その国の中心拠点の長などは、その地にいる天理教信者を糾合することにまず主眼を置く。筆者もそうであった。そこで、日本人が移民として渡っていった国などでは、結果的に天理教の拠点がすなわち一種の日系人コロニーのようになってしまう。そうなると、その国の人たちは違和感を感じ、ますます入りにくくなるという負のスパイラルを起こす。例えば東京で、ある特定の国の人たちが集団になって信仰している、日本人に馴染みのない宗教の施設には、おそらく日本人は非常に入りにくいのと同じだ。

こういったことも、天理教が、国によっては後発の日本の宗教よりも現地人信者が少ないことの理由の一つではないか。つとめの完成を目指すこと、それ自体は極めて重要なことだが、現地の人たちでそれを成し遂げようとする強靭な根気が海外布教には求められるだろう。

［註］

（1）『天理教河原町大教会史』（第 1 巻）、1989 年、53 頁。

# 国際化の中での日本語教育 ②

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

**日本語の必要性**

日常生活で外国人に会うことは別に珍しいことでもなく、もはや当たり前のようになってきた。数年前、京都の宇治へ留学生たちと校外学習に出かけた時のことだが、伏見稲荷神社へ行くと日本語は聞こえず、外国語ばかり聞こえてくるような感じがした。留学生たちが「外国人が多いなあ」と感嘆しているのも微笑ましいが、聞こえてくる外国語が分かる留学生もいるから、どこから来ている人たちか聞いてみた。中国や韓国、東南アジアから来ている人も多かったが、欧米の人もいたようだ。彼らは旅行者なのだから、特に日本語を流暢に話す必要もない。旅行に必要な最低限の挨拶や会話で充分なのかもしれない。しかし、同じ外国人でも日本に住み、生活するとなると別である。日本語が話せなければ日本人とコミュニケーションを取ることができず、トラブルになったり、不利益を被ることもある。見た目が外国の人だと、何となく“よそ者”と感じ、話も通じないだろうと、できればかかわりたくない人もいるだろう。しかし、日本語で話しかけられコミュニケーションが取れるとわかったら、安心して笑顔に変わり、親切に対応するということも多いのではないだろうか。パリ赴任中、街を歩いていると道を聞かれたり、時間を聞かれたりすることがけっこうあった。筆者はアジア人であり、見た目でわかるのに、どうして外国人にフランス語で道を聞いたりするのかとも思ったが、パリの多様化した社会では、そんなことは関係ないようだ。やはりそこで暮らしていくにはコミュニケーション能力が必要だ。大阪や東京だけでなく、地方の都市でも道に迷っていたら、そこに住んでいる外国人が親切に日本語で教えてくれるかもしれない。もうすでにそんな時代に入っているのではないだろうか。

**コミュニケーション能力**

「コミュニケーション能力」というと、なにも外国語だけの話ではなく、日本人同士でも社会生活を営んでいく上で大事なものだと誰もが思っているところである。言語による意思疎通能力のことで、言葉だけでなく表情や身振りなど非言語的な要素も含め、お互いに理解しあい、信頼関係を築いていく能力であるとも言える。キャッチボールのようにうまく会話を続ける能力でもあるが、これらを円滑に行うことが出来る知識、技術（コミュニケーションスキル）がないと社会生活を営む上で問題が起こってくる。言語学の分野で著名な Canale と Swain は、コミュニケーション能力の要素として、**文法的能力** (Grammatical competence)、**談話能力** (Discourse competence)、**社会言語能力** (Sociolinguistic competence)、**方略的言語能力** (Strategic competence) の４つを挙げている。要約すれば、文法的に正しい文を使用し、複数の文で談話を構成し、まとまりのある話ができ、相手との社会的関係にも配慮しながら適切に言葉を使い、コミュニケーションがうまくいかない場合には、言い換えたり、繰り返したりして、会話を修復・継続していくなどの能力が必要だということである。これは第二言語として日本語を学んでいる人に限ったことではなく、ネイティブの日本人にも必要な能力であり、どれかが欠乏していても円滑なコミュニケーションが取れない。日本人なら自然に身に着いていると思われがちだが、談話能力や社会言語能力が劣っていると感じる若い人に会うことも多くなってきているようにも感じる。逆に文法的能力がやや劣ってはいるが、社会言語能力、談話能力、方略的言語能力が優れ、充分に日本人とコミュニケーションが取れる外国人も増えてきているように感じる。日本語がそれだけ国際化しているということだろうか。

**ことばの役割**

ロシアの心理学者ヴィゴツキーは、『思考と言語』（柴田義松訳、新読書社、21 頁）で、次のように述べている。

> ことばの最初の機能はコミュニケーションの機能である。ことばは何よりも社会的交流の手段であり、発話と理解の手段である。ことばのこの機能も要素に分解する分析においては、ふつう言葉の知的機能から切り離されてしまい、二つの機能は平行的に、相互に無関係に、ことばの属性とされた。ことばは、いわばコミュニケーションの機能と思考の機能とを兼任しているのである。

つまり、ことばというのは、人が生きていく上で不可欠のものであり、単にコミュニケーションの道具としての役割だけでなく、人がいろいろ考えるための基本的な役割も担っているのである。またことばはアイデンティティとも深く関わりのあるものであり、人格形成においても重要な役割を持っていると言える。普通、第二、第三言語として外国語を勉強し、コミュニケーションが取れるようになっても、独り言を言ったり、何か一人で考え事をしたり、計算などをする時には第一言語で思考するはずである。幼い頃に外国へ移住し、その国の国語教育を受けたケースや植民地政策により、その国の国語教育を受けたケースなど、世の中にはいろいろなケースがあると思うが、根本的に人が頭の中で考える時に使うのは第一言語である。筆者も今、原稿を日本語で考え、日本語で推敲しながら書いている。今、戦争もない平和な時代の日本で生活している。しかし、そのような暮らしに慣れた我々は、外国が攻めてきて、世界の地図から日本が消え、日本語を使うことを禁止され、攻めてきた国の言葉を強制的に習わされるというような想像をしたことがあるだろうか。自分の生活のために新しい言語を習いはしても、思考する時の言語は日本語で、子供たちは宗主国の教育によって親とは違う第一言語で思考するようになる。そして、ひらがな、カタカナ、漢字という三つも文字を覚えなければならない日本語は合理的ではないと言い出すかもしれない。日本語というのは繊細なことまで表せる世界的にも珍しい言語であり、日本の文化を支えてきた元であるとも言える。しかし、日本語の素晴らしさをいくら説明しても子供たちには受け入れてもらえないということも起こるかもしれない。

ここまで書きながら「日本語を話す日本人」というのは何者なのかという思いに駆られる。仮定の話はやめて、現実に戻るが、これから日本はさらに多様化していくように思われる。見た目で日本人だと判断するようなことはなくなる時代に入るのかもしれない。コミュニケーションを取るための言葉であり、思考する上での言葉として日本に住む人々に日本語はこれからも必要とされるであろう。“ことば”というものは本当に大事なものだとも感じる。

# イスラームと断食①―楽しく厳しいラマダーン―

おやさと研究所講師
澤井　真　*Makoto Sawai*

## ラマダーンは断食ではない!?

日本では、イスラームはキリスト教に比べると、ほとんど知られていない。あまり馴染みがないとはいえ、「ラマダーン」(Ramaḍān）という言葉を聞いたことがある人は多いだろう。ラマダーンとは、イスラーム暦の第９月のことである。

イスラームでは、イスラーム共同体がマディーナ（メディナ）へ移住したことをヒジュラ（「聖遷」と翻訳されることが多い）と呼ぶが、そこからイスラーム暦が始まった。１カ月が月の満ち欠けによる30日であるため、１年（12カ月）では360日となる。閏月などを採用しないため、毎年５日ずつ前倒しになっていく。こうした暦の体系の第９月をラマダーンと呼ぶのである。つまり、ヒジュラに基づくこの暦は「ヒジュラ暦」と呼ばれる。

そのため、「ラマダーン」とは「断食」のことだという誤解もあるようだが、ラマダーンとはあくまで月の名前である。ラマダーン月で行なわれる断食とは、アラビア語で「サウム」(sawm）という。ラマダーン月の１カ月間、ムスリムは基本的に断食するため、日本では「断食月」とも呼ばれるのである。

## 断食の期間

ムスリムたちの断食は、日の出から日の入りまでのあらゆる飲食を断つことである。つまり、それ以外の時間帯での飲食は可能であるので、１カ月すべてを断食するわけではない。「断食月」という言葉が独り歩きするのか、飲まず食わずの大変な苦行を行なうわけではない。より正確な断食期間については、筆者が体験したところによると、夜明け前の礼拝（ファジュル）の呼びかけ（アザーン）から日没時の礼拝（マグリブ）の呼びかけまでである。

筆者はマレーシアのイスラーム系の大学に留学していた。周囲はすべてムスリムの友人たちであったということもあり、彼らの断食月の様子を見ることができた。年間を通じて午前７時台に日の出であるが、夜明け前の礼拝は午前６時前後であった。そのため、ムスリムの友人たちは５時台に起床し、礼拝の呼びかけが聞こえるまで断食前の食事（スフール）を摂っていた。しかし、呼びかけの声が聞こえるや否や、食べる手を止め、口にある食べ物を飲み込んでから礼拝に向かっていた。

同様に、日没時の礼拝の呼びかけ前に食事や飲み物を準備し、呼びかけの声が聞こえた瞬間に飲み物を口に含んでいる様子を目にしたことがある。豪勢な食事を目の前にしながら、ひたすら待っている人々を何度か目にしたが、あまりにも手持無沙汰そうな光景に、「大変だなあ」と思わずつぶやいたことがある。

## 断食はミルクとナツメヤシで

ムスリムの友人に誘われて、礼拝場所で断食明けの食事（イフタール）の様子を見に行ったことがある。そのとき、イスラーム法学を勉強している友人が、「断食明けは、まずナツメヤシとミルクなんだ」と言って、筆者に薦めてくれたことがある。デーツとしても知られているナツメヤシの栄養価については、近年、日本でも注目が高まっている。その効果はともかく、ナツメヤシとミルクで胃腸を整えてから、食事を食べている姿を見た。

ナツメヤシとミルクを食べる友人

重く垂れ下がるナツメヤシの実

ナツメヤシについては、クルアーンにも「ナフル」(nakhl 他にも nakhīl など）などと記されており、神の恩寵の豊かさを表す果物として知られている。また、王であろうと奴隷であろうと等しく人々が口にする果実でもある。クルアーンには、以下のようにナツメヤシについて記されている。

> 神こそは、雨を天から降らす方である。我はこれをもって全てのもの（植物）の芽を萌え出させ、次に新緑［の群葉］を出させ、累々と穀物を実らせる。またナツメヤシの莢（さや）から、［重く］垂れ下がった房［を生え出させ］、またブドウ、オリーブ、ザクロ等、同類異種の果樹［を育てる］。その果実が結び、そして成熟するのを観察しなさい。その中には本当に信仰する人々への徴しがある（Q6:99）。

## ラマダーンの楽しみ

ラマダーンの期間中、ムスリムたちは、その日の断食明けの食事をどこで誰と食べるのかをめぐって、連絡を取り合いながら予定を立てることになる。また断食明けには親族宅を訪れたり、友人たちと出かけたりするのを楽しみにしている。そのため、ラマダーンの夜は長い。

また、ムスリムによる断食の説明として、貧者を思うという意味付けもなされている。この点に関して、筆者は今もなお忘れられない思い出がある。エジプトは2011年の「アラブの春」以降、2013年７月の軍事クーデターによって軍事政権に逆戻りした。2014年７月、ルーム・シェアをしていた日本人の友人と一緒に、エジプト軍が人々に提供する断食明けの食事を食べるため、近くの仮設テントを訪れたことがある。提供された食事は、水、ナツメヤシ、白米、野菜、小さな一片の鶏肉、そしてスープであった。ほとんどの人が食べ終わって帰った後で、テントにいるのは私たち２人以外には、５歳くらいの小さな女の子１人だけだった。

女の子は私たちを見てニコッと笑ったかと思うと、私たちに近づいて彼女の持っていた小さなナツメヤシを渡してくれた。そして、彼女は自分の席に戻っていった。家路につくまでのあいだ、友人と、「あの女の子はどうして一人で食事を食べていたのだろうか」、としんみりした気持ちで話していたのを思い出す。食事自体は決しておいしいとは言えなかったが、彼女がくれたナツメヤシから、貧しいなかにも神の恵みを共有しようとするイスラームの温かさに触れた気がする。

［註］

（１）クルアーンの訳出に当たっては、日本ムスリム協会の翻訳『日亜対訳　聖クルアーン』(2004年）を用いたが、文脈に応じて改めた。

# 生命倫理とキルケゴール―逡巡と規範、逡巡と決断について―

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

## 生命倫理の難しさ

生命倫理は、最も学際的で専門的な議論が行われている応用倫理学の領域である。その問題はいずれも難問ばかりで、とくに個別ケースで言えばベストな解決策は困難である。医療の現実や社会の諸条件を勘案し、一定のガイドラインを満たした上で、ようやくベターな結論が出せるといった具合である。末期患者の延命治療はどこまで認めるべきか、臓器移植のドナーは誰がいつなるのか、代理出産は是か非か、是とした場合その条件はどのようなものか等々、これらの問題を少しでも考えてもみるとよい。医学・医療の分野のみならず、法学・倫理学・社会学、さらには経済学・人類学にまたがる知がそこに求められてこよう。ガイドラインが出来たとしても、思わぬ事態が発生すれば、せっかく立てた原則が揺らぐことも少なくない。コロナ禍の中、医療崩壊が起こり、高齢者というだけで治療が後回しにされるといった事例などがそうだ。そうなれば、医療の公平性が確保できないことを覚悟しなくてはならなくなるだろう。

これら具体的・現実的な生命倫理の問題が、キルケゴールや実存思想を応用して直接解決できるかと言えば、それは不可能である。どんな哲学思想も、そのような応用のために理論が組み立てられているわけではない。また、応用倫理学とは銘打っていても、既存の哲学思想をそのまま現場に応用できるわけではない。（応用倫理学 applied ethics という名称がそもそも誤解の元なのである。）哲学思想は、実践的な問題解決型ではなく、反省的な問題解読型の知のあり方を取る。それゆえ、生命倫理の問題をキルケゴールで解決することはできないが、この問題の本質をキルケゴールで読み解くことは可能なのである。むしろそのような読解作業は、生命倫理の問題を深く受け止めるために必要なのである。今回は、患者の自己決定という生命倫理の原則を取り上げて、このことを考えてみたい。

## 不条理を生きること

この問題を考える手掛かりとして、田村京子『生体臓器移植の倫理』（慶應義塾大学出版会、2020 年）を紹介しておきたい。この本の副題は「臓器をめぐる逡巡と規範」である。生命倫理においては、なんらかの「規範」を求め、法制化を進める議論とは別に、生身の人間として「逡巡」する有様を押さえ、人間学的に深めていく議論も重要である。なぜなら、これがあるからこそ、「自分だったらどうするか」と考える当事者性の視点を確保できるからである。臓器移植の議論では、脳死の人からの臓器移植がよく取り上げられるが、最も多いのは家族や親族間における生体臓器移植である。この場合、臓器の提供者は、大なり小なり必ず「逡巡」する。そして、その中を自己決定していかなければならない。『生体臓器移植の倫理』は、この問題に十分目配りしつつ、倫理の語られ方にまで踏み込んで論じた好著である。

田村によれば、患者の自己決定という倫理原則は、功利主義からすれば、患者の治療効果も上がって望ましいものであり、義務論からすれば、結果の如何にかかわらず自己決定自体が善となる。そして実際、医療現場では治療効果の観点からも、患者の権利擁護の観点からも、患者の自己決定を受け入れている。つまり、それだけ自己決定が、倫理学の学説的からも医療の現場からも基軸的な概念となっているわけだ。自己決定は実存思想の言葉で言えば決断となる。そこに問題が実存思想、そしてキルケゴールへと連結する接点が見いだされる。

## 不条理の中の決断

ただし、自己決定とは言っても、与えられた制約の中で可能な限りベストと思われる落としどころを見つけていくしかない。どんな決断をしたところで、不本意な部分はどうしても残り、結果としてはベターな選択にならざるを得ないだろう。生体臓器移植で言えば、健康な腎臓の片方や肝臓の一部は、もし何もなければ提供することなど決して考えられない。たまたま家族に臓器移植が必要になったので、提供するかしないかを自己決定しなくてはならないのだ。引き受けることは重い、かといって断ることはそれ以上に重い。それは不条理としか言いようのない状況であり、この状況の下で自らが納得できる結論を出していかざるをえないのである。

しかし不条理そのものについては、自分に与えられた運命として引き受けるしかない。人間とはそのような意味で homo patiens（受苦的人間）だと捉えたのは、独自の実存分析を唱えたＶ・フランクルであった。この不条理を受け止め、決断を下すということにおいて、ようやく実存思想に光が当たってくる。ただし、それはメタレベルでの議論である。実存思想それ自体、決して解決を導く処方箋ではなく、あくまで解読のための方法論として理解すべきなのである。

ヤスパースの表現を用いれば、不条理な事態とはいわば人生の暗号であり、我々は自らの人生の中でその暗号を解読していくことが求められる。不条理の背後に人の世の無意味さを見て、自らの力で意味を作り出そうとするのがニーチェやサルトルの目指す道である。不条理の背後に罪を見て、贖罪を通じて救済を得ていこうとするのがキルケゴールの取る道である。無神論的であれ有神論的であれ、どちらの道も実存思想の道であるが、それだけでは具体的な解決策を提示していないことを知るべきだ。どちらの道も、ひたすら人に問いを投げかけ、反省を深めるばかりである。「逡巡」はますます募るであろう。しかし、その中で下される決断は全人格的な重みを持つ。実存思想の狙いはここにある。

人間が生身の存在である限り、逡巡やためらいは必ず生じる。規範を設けたからといって、それらが解消されるわけではなく、決断は自分自身が下していかなくてはならない。いや、どんな医学的、法制度的、社会的条件が揃っても、その医療を選択するかしないかは自分の決断次第である。そしてその決断において、人間がどこまで深く、どこまで主体的に、自らの命、自らの実存を受け止めたかが問われてくるのである。決断がそのように自分自身にかかっていることを自覚した時、我々は単独者としての自己を発見するだろう。その時、崖の上にただ一人だけで佇んでいるような恐怖と孤独を感じるかもしれない。しかし、ふと自分の傍らで、やはり一人立っている人間がいることにも気が付くだろう。その人間こそキルケゴールその人なのである。

# 仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑩

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

## 鳩摩羅什の漢訳

釈迦は教えを明文化せず、あくまで話し言葉（パロール）によって伝達した。後世そのパロールが結集を経て、次第に書き言葉（エクリチュール）として仏典に保存された。中国ではそのエクリチュールが再び鳩摩羅什などの訳主を媒体としてパロールに変換され、そのパロールから漢訳仏典というエクリチュールが生み出された。「声」の言語と「文字」の言語の交錯過程で、釈迦の言葉が「語り」と「読み」により、それぞれの内面に浸透し、信仰の息吹が喚起されていった。漢訳の過程で訳主のパロールは、釈迦の「聖なる言葉」として人々の心の琴線に触れ、外来の仏教が人々のよりどころとなっていった。そこには釈迦の言葉が実存的自己を成立させる世界そのものに昇華し、また世界内存在としての自己がその言葉によって満たされていく過程が読み取れる。自己存在を仏教者として現実世界に織り込む役目を果たしたのが漢訳仏典という交錯潜勢体としてのエクリチュールであったと考えられる。

鳩摩羅什が訳出した経典の数は経録によって異なるが、『出三蔵記集』によると 35 部 294 巻である。彼は姚興の要請により、すでに流布していた大乗経典の改訳にとりかかった。彼の改訳は通説としてすでに広まっていた解釈を覆した。例えば法華経は、敦煌出身の竺法護が 286 年に『正法華経』として漢訳したが、鳩摩羅什は 406 年に『妙法蓮華経』として漢訳した。鳩摩羅什はこの経典のタイトルを「正法」から「妙法」に改めている。このタイトルのサンスクリット語は、Saddharma-puṇḍarīka-sūtra で、直訳すれば、Saddharma（正しい法）、Puṇḍarīka（白蓮華）、Sūtra（経）となる。竺法護はタイトルを字義通り訳出していることがわかる。ここで重要なのがサンスクリット語の精緻な文法の理解である。パーニニの文法書 *Aṣṭādhyāyī* とその注釈書 *Kāśikāvṛttī* によれば、上述の Puṇḍarīka は、同格限定複合語の後ろになる場合、前の語を比喩的に修飾する語の一つとされる。この場合、Saddharma は比喩される語で、Puṇḍarīka は比喩する語となる。仏典には Puṇḍarīka 以外に Utpala（青睡蓮）、Padma（紅蓮華）、Kumuda（白睡蓮）の言及もなされている。それらの中で一番勝れているのが Puṇḍarīka（白蓮華）であり、Puṇḍarīka には「最も勝れた」という比喩的意味がある。したがって「白蓮華のように最も勝れた正しい法」がパーニニ文法に準拠した解釈となる。竺法護の訳は字義通りであり誤訳とは言い難いが、鳩摩羅什は同格限定複合語としての Puṇḍarīka の比喩表現を考慮し、あえて「妙」を用いたと考えられる。さらに鳩摩羅什は法華経序品では「最も勝れた」という語 Vara に対しても「妙」の漢訳を施している ( 植木 , 2011:89)。すべての経典は Saddharma（正しい法）であり、中でもこの経典を「最も勝れた」経典であると彼は理解していたのではないか。法華経の内容に鑑みても、一乗思想や久遠実成の思想を基盤に多様な教理が融和的に展開されており、様々な学派の理解を超えた意味世界が描写されている。鳩摩羅什は法華経の精神を凝縮し、それを「妙」の一語に込めたのではないだろうか。

この「妙」には万物の根源としての「道」を形容する老荘の思想的影響があり、老荘思想を基盤に法華経の法を玄妙不可思議なもの、人知には計り知れない神秘的な法として理解させるために鳩摩羅什があえて改訳したとの見方があり、しばしば鳩摩羅什の翻訳は原意を逸脱していると指摘される（金倉 , 1972:448)。

結果的にこの「妙法」への改訳は漢人に受け入れられ、その後の法華経理解に影響を及ぼした。それは鳩摩羅什が意図したものかどうか定かではないが、「妙」に含意する老荘的影響が法華経の理解をより神秘的なものとして決定づけた。

また鳩摩羅什以前の漢訳では、経典の冒頭部分は「聞如是」とされていた。これは釈迦と常に行動を共にし、誰よりも多く教えを聞いていたアーナンダが釈迦入滅後に結集の際、Evaṃ mayā śrutaṃ ekasmin samaye Bhagavān ...（このように我によって聞かれた。ある時世尊は～）と述べ、釈迦の教えを追憶し口述したことに起源をもつ。サンスクリット語では mayā(我によって）とあるので、鳩摩羅什はこれを「如是我聞」と訳した。

鳩摩羅什以前にあえて「我」が訳出されなかった背景には、仏教の無我説が影響しているとの見方がある（植木 , 2011:109)。

仏教の重要な教えの一つである Anātman は、ātman（自己）と an（否定の接頭語）の複合語で、本来、執着にとらわれる自己を自己として認識することを戒め、法に因る真の自己を覚るために説かれた教えである。何らかの実体や霊魂のようなものが存在するという想定自体を否定し、対象としての「我」あるいは「我がもの」への執着を捨てるための実践的な教えだが、鳩摩羅什以前には、Anātman の否定の接頭語を「無」とし、「無我」という訳語から自己存在の否定という教理が独り歩きした。その教理との整合性から敢えて「我」が削除され「聞如是」となったのかもしれない。しかし、鳩摩羅什は否定の接頭語として「非」を用いて Anātman を「非我」とも訳している（植木 , 2011:45)。鳩摩羅什は Anātman に対して多様な解釈を有しており、単に上述の理由から「我」を削除することを容認しなかったと思われる。さらに、Evaṃ mayā śrutaṃ（このように我によって聞かれた）の後に続く ekasmin samaye（ある時）が、経典によっては前にかかり「ある時このように我によって聞かれた。世尊は～」、あるいは前後双方にかかり「ある時このように我によって聞かれた。（その時）世尊は～」となることも想定し、原文の語順通りの訳「如是我聞」を採用したとも考えられる。鳩摩羅什以降はこの訳が定着していった。

鳩摩羅什は訳場において、漢人沙門の意見を積極的に取り入れたという（木村 , 1997:251)。その影響もあって、彼は達意の意訳を重視し、リズムや格調など漢人の気質に適う翻訳を心掛けていたようだ。経典は本質的には「読み」ではなく「語り」のためのものである。彼の訳文からは、聴聞する人々がいかにそれを釈迦の「聖なる言葉」として聴き、理解しうるかという、伝道者としての配慮が感じられる。

［引用文献］
植木雅俊『仏教、本当の教え』中央公論新社、2011 年。
金倉圓照「法華経における法護と羅什の訳語」坂本幸男編『法華経の中国的展開』平楽寺書店、1972 年。
木村宣彰「羅什と玄奘」高崎直道他編『仏教の東漸　東アジアの仏教思想 I 』春秋社、1997 年。

遺跡からのメッセージ（66）

# 大和の文化遺産を学ぶ④ － 1400年の歴史を刻む法隆寺

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

令和３年（2021年）の幕開けにあたり、１月２日、斑鳩の地に歴史を刻む世界遺産・法隆寺を家族とともに訪問した。正月にもかかわらず人影まばらな境内を歩きながら、疫病の退散を祈り、法隆寺の悠久の歴史に思いを馳せる。現存する世界最古の木造建造物として知られる西院伽藍は、飛鳥時代に建立された金堂と五重塔が左右に並び、何度訪れても圧倒的な存在感にため息が出る。意匠を凝らした木製部材が複雑に組み合った建物の軒先には、蓮華文を飾る軒瓦が美しく連なり、全体が調和して、独特の雰囲気を醸し出している。金堂や塔に用いられた「法隆寺式軒丸瓦」は、蓮弁が二枚一組になった「複弁蓮華文」の外側に鋸歯（きょし）文が巡るのが特徴で、７世紀後半以降に各地に普及する。

写真　法隆寺の再建伽藍を飾った軒丸瓦（天理参考館）

このような金堂の建築を眺め、基壇の石壇を登って堂内に足を進めると、柔らかいLED照明が、安置された仏像の数々と壁面の仏教絵画（模写）を厳かに浮かび上がらせている。金堂の堂内にLED照明が設置されたのは平成20年（2008年）のこと。昭和24年（1949年）１月26日、火災による壁画の焼損事件以降、長きにわたって照明がなく、それまでは、自然の光を頼りに、薄暗い堂内を眺めるしかなかったのだ。この火災事件が、昭和25年（1950年）、文化財保護法が制定される契機となったことも、法隆寺の長い歴史の一コマとして重要だ。焼損した金堂壁画は、激しく損傷を受けたにもかかわらず重要文化財に指定され、収蔵庫で現状のまま保存されて現在に至っている。

思い出されるのは、文化財保護法制定の70周年を記念して、昨年の2020年３月13日（金）～５月10日（日）、東京国立博物館で開催予定だった特別展『法隆寺金堂壁画と百済観音』が、政府による緊急事態宣言の発出によって、やむなく開催中止となってしまったことだ。展示室には、国宝・百済観音像や焼損前に模写された壁画などが運び込まれて、展示作業が終了し、開幕を待つばかりの状況だった。23年ぶりに東京で公開されるはずだった百済観音像も、見学者の目に触れることなく、特別展のために新調されたガラスケースとともに法隆寺に戻り、今は、いつものとおり、法隆寺の名宝を安置する大宝蔵院で公開され、何事も無かったかのように、平然とした笑みを浮かべている。

さて、壁面の模写絵画に囲まれた金堂内陣の須弥壇は、「東の間」「中の間」「西の間」の三つに分かれ、それぞれ、薬師如来像、釈迦三尊像、阿弥陀三尊像の本尊が安置されている。薬師如来像の光背裏面には90字の銘文があり、病を得た用明天皇が平癒を念じて寺と薬師像を造ることを発願したが、叶わないまま崩じてしまい、推古天皇15年（607年）、天皇と聖徳太子（厩戸皇子＝うまやどのみこ）が遺詔を実現したと伝えている。この銘文が創建の由緒を伝える斑鳩寺は、『日本書紀』によれば、天智天皇９年（670年）、落雷のため、「一屋余す事無く焼失した」とされている。この時に焼失した斑鳩寺は、昭和14年（1939年）に西院伽藍の南東で発掘された若草伽藍跡で、現在の西院伽藍は、奈良時代の初頭までに飛鳥時代の様式で復興されたものと見るのが定説だ。飛鳥時代に遡る仏教寺院は、ほとんどが考古学的な遺跡と化しているのだが、伽藍や堂内の内陣、仏像が旧状を保ったまま護り継がれてきたのは、奇跡に近い。

一方、釈迦三尊像の光背銘196字が伝える造仏の由来は次のようだ。推古天皇29年（621年）、聖徳太子の生母・穴穂部間人（あなほべのはしひと）皇女（ひめみこ）が崩じたのに続き、翌年（622年）正月に聖徳太子とその妃・膳夫人が病に伏し、三宝に従い、親族が聖徳太子と等身の釈迦像を造ることを発願するが、２月になり、太子と夫人が相次いで亡くなってしまう。そこで、推古天皇31年（623年）、釈迦三尊像を仏師の鞍作止利（くらつくりのとり）に造らせた。この銘文によれば、聖徳太子の没年は推古天皇30年（622年）だが、『日本書紀』には、推古天皇29年（621年）の春２月５日、夜半に厩戸皇子が斑鳩宮で崩じたとあり、１年のずれがある。『日本書紀』に従うならば、今年、令和３年（2021年）は聖徳太子の没後1400年ということになる。

これを記念した特別展「聖徳太子と法隆寺」が、奈良国立博物館（４月27日～６月20日）、東京国立博物館（７月13日～９月５日）を会場として開催される予定になっている。開設された公式サイトによると、法隆寺で護り伝えられてきた寺宝の数々を通して、太子その人と太子信仰の世界に迫る構成になっている。注目されるのは、法隆寺の各堂内に安置されている本尊や秘仏などが展示室に出陳され、普段とは違った環境でじっくりと観察する機会が与えられることだ。本稿で触れた金堂の「東の間」本尊の薬師如来像は、これまで門外不出だったが、奈良と東京の両会場に出陳されるとのことで、堂内では見ることのできない光背銘も展示室では観察することができるかもしれない。金堂内陣の後方に安置される多聞天・広目天像は、日本最古の四天王像だが、いつもは近づいて見ることができない。また、東院伽藍夢殿の行信僧都（ぎょうしんぞうず）座像は奈良時代の肖像彫刻の傑作だが、普段は、本尊・救世観音像の左脇の厨子内に安置されている。聖霊院の本尊の聖徳太子像は、太子の500年忌にあたり、平安後期に造立された秘仏だが、今回は特別に展示室で公開されるという。一方、国宝・伝橘夫人念持仏厨子や国宝・玉虫厨子、夢違観音など、大宝蔵院の宝物類も出陳されるが、普段から展示ケースに収まっているとはいえ、やはり人気を集めることだろう。

法隆寺の金堂壁画に焦点を当てた昨年の特別展は残念ながら中止となってしまったが、聖徳太子の1400年遠忌を記念した今年の特別展が無事に開催されることを祈るばかりである。

# 5. コロンビアの体質 5

天理教コロンビア出張所長
清水　直太郎　*Naotaro Shimizu*

7）島嶼地域

昨年（2020 年）11 月、コロンビアの島嶼の主要地域であるサンアンドレス島、プロビデンシア島は想像を絶する光景となった。

サンアンドレス島

イオタと呼ばれる風速 170km とも 250km とも言われるとてつもない大型ハリケーンが、16 日コロンビアのリゾート地であるこの両島を根こそぎ破壊したのである。イバン・ドゥケ大統領は「基幹設備の 99％が壊されてしまった」と語った。復旧にはおそらく相当時間を要するだろう。

＊島嶼地域の詳細

コロンビアの島嶼地域は２つの海洋に位置する。一つはカリブ海（大西洋）、もう一つは太平洋である。

カリブ海には、サンアンドレス島とプロビデンシア島、そしてサンタカタリーナ島がある。面積はサンアンドレス島が 26km²、プロビデンシア島が 17km²、サンタカタリーナ島が 1 km²。人口はこの３つの島で約８万人弱（2015）。人種構成は約 55％が黒人系、30 ～ 40％が混血と白人系である。

島の位置は、コロンビアの最寄りの海岸からは遠く（720km）、一番近い国はニカラグア (230km) である。そのため、後述するが、コロンビアとニカラグアの両国間では領土や排他的水域の問題を常に抱えている。

カリブ海の島々は、気候は熱帯ではあるが、観光地になるぐらいだから、ジメジメとした気候ではないらしい。

＊カリブ海地域の影響

カリブ海地域の特徴をほんの少しだけ語らねばならない。この地域は、クリストバル・コロン（コロンブス）が訪れて以来、近世に渡りスペイン、オランダ、イギリスなどのヨーロッパ、その後アメリカがそれぞれ勢力を振るってきた。したがって文化（言語、風習、宗教）は、他のラテンアメリカ諸国と同様もしくはそれ以上の多様性を持っている。

かつてはモンゴロイドの先住民が住み、15 世紀にヨーロッパ人たちが到来し、やがてアフリカの人々が奴隷として連れて来られ、奴隷制廃止後はアジアからの労働者がやってきた。カリブ海地域は、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジアという世界各地の人々とその文化が交鎖して形成されてきた地域であるという意味でもきわめて特色ある地域である。[1]

＊歴史

なぜ、この島々が本国コロンビアより遠く離れているにも関わらず、領土になったのか。島嶼地域の中では、この２つの島（サンタカタリーナ島はプロビデンシア島と橋続き）で１つの県となっている。県庁所在地はサンアンドレスである。２つの島の往来は、飛行機で約７分、船で３時間である。[2]

まず、この地域は 1510 年にスペインが統治した。その後オランダやイギリスがバミューダ島やバルバドス島に到着しプロビデンシア島に住み始めた。スペインとイギリスの間には覇権争いもあったが、スペインが勅令をくだし、この島々の権限をボゴタ王立行政機関 ( ヌエバ・グラナダ副王領 ) に与えた。これが 19 世紀初期だった。[3] 当時の領土は現在のエクアドル、ベネズエラ、パナマ、コスタリカ、ニカラグアの海岸部を占めていた。

20 世紀に入り、コロンビアとニカラグアの間に正式に条約が締結され(1928 年)、コロンビアの領土として認識されていた。しかし、2012 年 12 月「領海」問題が起こり、国際司法裁判所の判決によってコロンビアの排他的水域はそれまでの 43％を失った。コロンビアはこの判決を受諾しておらず、現在も問題が続いている。[4]

＊経済

カリブ海の島々（サンアンドレス島とプロビデンシア島）の主な経済と財源は「観光業」である。400 ～ 500 軒のホテルがあり、コロンビア人なら一度は行ってみたいと言われる観光地である。私自身は訪れたことがないが、コロンビアの友人からは「良い所ですよ、絶対行ったほうがいいよ」と常に勧められるコロンビアのリゾート地である。いわゆる、コロンビア人の自慢の観光地という気がする。さて、冒頭にも書いたが、ハリケーンの通る地域であり、今回の被害は甚大なものである。ハリケーンというのは台風の倍ぐらいの勢力があるそうだ。上陸した島や国は大打撃を受けている。2020 年、プロビデンシア島は大統領の発表通り、施設が使用できなくなった。この両島の観光産業は将来どうなるか危惧されている。

＊文化

言語は公用語のスペイン語だが、その他英語と現地語や色々な言語が混成してきた「クレオール語」が話されている。

宗教についてはプロテスタントが多く、その中でも「パブテスト派」が際立っている。次はカトリックである。また少数派ではあるが、ペンテコステ派、イスラムやエホバの証人も入っている。

＊太平洋にある島々―ゴルゴナ島とマルペロ島について

この両島には現在誰も居住していない。カリブ海の島々と違い、太平洋の島々湿度 90％にもなり降水量も多い。

ゴルゴナ島の面積は 26km² で、マルペロ島は 1.2km² である。ゴルゴナ島は 1860 年から 1984 年まで刑務所が設置されていた。その昔、紀元前 3000 年くらいから先住民が暮らしていた。あのペルーを征服したフランシスコ・ピサロもこの島を訪れたことがあるという。その後、1960 年にアルベルト・ジェラス・カマルゴ大統領が島を国家占有にして、刑務所を建設した。かつて２家族が住んでいたが、島を後にした。現在彼らの建物は研究施設の一部として使用されている。[5]

1984 年、当時のベリサリオ・ベタンクール大統領は刑務所を閉鎖、ゴルゴナ島は国立公園としての道を歩むことになった。現在は、国立公園機関に許可を得て訪問することができる。住人はいないが、研究のための宿泊施設がある。[6]

[参照文献及び URL]
(1) 志柿光浩、「第８章カリブ海地域」、国本伊代・中川文雄編『改訂新版ラテンアメリカ研究の招待』、新評論、2005 年、224 頁。
(2) https://baquianos.com/blog/providencia-como-llegar
(3) http://regioninsular.com/región-insular-de-colombia/
(4) 同上。
(5) https://es.wikipedia.org/wiki/Isla_Gorgona
(6) 同上。

# 法王：人は慈悲で救われる

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

## 人は慈悲で救われる、道徳では救われない

フランチェスコ法王は、現在、次のような内容の本を用意している。その骨子を紹介しよう。

> 我々は、世界は変えられないという態度をとっている。しかし、キリストの教えには世界の歴史を変える力がある。キリスト教はその伝道と共に新しい人間観を広めてきた。その典型的な例が、聖パオロと言えるだろう。彼が入信した時、神が聖パオロの前に現れ、彼に慈愛の目を向けたのだ。神は、このキリスト教徒を迫害してきた人間を、慈悲で導いた。5世紀に特にアフリカで広まったペラギウス主義[(1)]に惑わされてはいけない。この主義には、信仰というものが、道徳に入れ変わったところがある。キリスト教は、世界的な動向や、その折々に現れたイエスの霊によって変わったのではない。すべての川は、大きな川も小さな川も含めてこの2000年の間、つながりあって滔々と流れているのだ。慈愛というのは、感動から、驚きから、恩寵から生まれる。歴史的に見て、当初より、キリスト教徒の慈悲は、それを必要とする人たち、すなわちとても弱い立場の人間である寡婦、貧者、奴隷、病人、また社会から疎外された人々に向けられていた。苦しみに喘ぐ人と痛みを分かち、不公平を糾弾し、平等を求め、与えられた境遇に寄り添い、そこから抜け出す働きをすることだ。
>
> 汝は、救けを必要とする人を救けるのだ。汝の財産は汝のものではない。財産の管理を任されているだけである。財産は必要な者に公平に分け与えるのだ。

## 公式行事の変更

昨年（2020年）3月、4月、5月半ばまで、ヴァチカンでは、公式行事のキャンセル、行事の変更、儀式の時間的変更などがなされた。しかし、5月の下旬より規制が緩和され、マスクをかけ、人と人との距離を1.5m以上保てば、集会を開いてよいということになった。そのために、教会のミサも法王の毎週日曜日のアンジェルスの行事も再開された。ここで、人々の気分はやっと解放されたという感じで、自分中心の考えもいろいろと出て来た。時は夏。例年のようにヴァカンスの時期になり、人々はあちこちに出かけた。ところが、7月、8月とヴァカンスが終わって帰って来た時、特にクロアチア、マルタ島、スペイン、ギリシャから帰国した人たちの多くに、コロナウイルスの陽性の反応が次から次へと現れた。それでもまだ、9月、10月はかなり平穏無事な日が続いた。

ヴァチカンの日曜日、正午に行われるローマ法王のアンジェルスは、例年のように、ローマ法王を一目見ようという旅行者はいなかった。また、社会的距離をとることを義務づけられたので、参加する信者も少なかった。そこで12月のクリスマスをどのようにするかという問題が起きてきた。12月8日は聖母マリアの「無原罪のお宿り」の聖日だ。スペイン広場の南に位置する柱の上に立つ聖母マリアの像があるが、例年では午後4時には法王の臨席の下、ローマの消防団がハシゴ車を使って、その聖母マリアの腕に花輪を捧げるという儀式が行われる。しかし、コロナ禍の中にあって、多くの人は集まってはいけないことになっているので、法王はその場に臨席しないことを早々と表明していた。スペイン広場の聖母マリアの像への献花は67年間続いているが、中止になった。12月5日より8日まで、4日間の連休となり、8日には大勢の人が出てくると心配されたからだ。12月8日の早朝、夜明け前の7時ごろに法王は雨の降る中、広場の聖母マリア像の柱のたもとに、傘をさしてやって来て、聖母マリアに花輪を捧げていたが、その姿に感動した人も多かったようだ。

こうして、12月24日、クリスマス・イヴを迎えた。例年だと、ヴァチカンのサンピエトロ教会に、枢機卿をはじめとして、ヴァチカンの各国大使夫妻、キリスト教共同体の代表者が集まり、教会の中は人でいっぱいになるところだ。しかし、ミサの場所は、教会の中央部ではなく、教会の一番奥の部分が使用されていた。コロナ禍のために、夜は10時以降、家から外出禁止となっているので、ミサは例年より早く始まって、早く終わった。つまり午後7時半に始まり、9時ごろには終わった。人々は家に帰り、夜中零時にキリストの誕生を実際に祝ったのである。

## 13名の新枢機卿が誕生

昨年11月28日、法王フランチェスコは7回目の新枢機卿任命式を行なった。これはすでに1カ月前の10月25日に誰を任命するか発表されていたものだ。全員で13名が任命された。その中で特筆されることは、一つ目はヴァチカンの財政問題で、ロンドンの建物を購入したベッチュー枢機卿が解任されていたので、その後任が決まったこと。二つ目はアメリカ・ワシントンから初のアフリカ出身のアメリカ人ウィルトン・グレゴリーが選ばれたことだ。今回13名の任命者の内訳は、イタリア人は半数以下の6人、80歳以下の法王選出の選挙、つまり、コンクラベに参加できるのが9人。4名はすでに80歳以上で、コンクラベの参加資格は無い。参加可能者は、イタリア人だけに限ると半分の3人だけだ。今回の任命で、枢機卿の総数は229人となった。そのうち、コンクラベ参加資格を持つものは128人である。ヨーロッパ人は53人、ラテンアメリカからは24人、アフリカ人が18人、アジア人が16人、北米アメリカ人が13人、オセアニアから4人となる。229人の枢機卿のうち、現法王フランチェスコによって任命されたのが73人となる。それゆえ、次期法王は現法王フランチェスコの息のかかった人になるだろうと推測されている。イタリア人が法王になる確率はますます低下していくようだ。

今回の任命式には、フィリピンのカピスの大司教ホゼー・フェルテ・アルヴィンクーラ氏とボルネオの使徒代理コルネリウス・シムの両氏は、コロナ禍によるパンデミックのために儀式に参加することはできなかった。

［註］

（1）ペラギウス主義：ペラギウスは禁欲主義を加味した自然主義的道徳論を打ち出した。彼はイギリス人で、ローマやカルタゴに赴いて教えを説いたが、後に異端とされた。

# ウシにまつわるお話

天理参考館学芸員
幡鎌　真理　*Mari Hatakama*

令和３年、西暦 2021 年が幕を開けた。昨年来得体の知れないウイルスが世界に蔓延し、人々を苦しめ、平穏な日常の生活を破壊している。この後、本年が安寧であることを切に願っている。

図１　赤べこと金べこ　すべて日本
（左から福島、福島、岩手）　昭和戦前　高 12.5cm 他

さて、丑年が始まった。日本では「駿馬」に対して「鈍牛」と称されるように、ともに家畜として大切な働きをする両者でも、ウシはいささかスマートさに欠ける印象が強い。しかし、古来米作りを中心とする日本の農耕では、ウシは犂を引いて土地を耕す労働力の担い手として重要な役割を果たす動物だった。その証拠に全国各地に展開する郷土玩具でも多数登場し、その造形の多彩さは断然ウマを圧倒する。３俵の米俵を背中に積んだ「俵牛」、疱瘡除けや皮膚病治しの「撫牛」、東北地方の「赤べこ」などなどいずれも愛らしい。

図２　影絵劇トーガル・コンベヤータの人形「飾り牛」
インド　20 世紀後半　長 58.5cm

もともとウシと人間とのかかわりが遙か太古の昔にさかのぼることは、旧石器時代のアルタミラやラスコーの洞窟に描かれた野生のウシからも窺い知ることができる。中国では新石器時代（紀元前 10,000 ～紀元前 2,000 年頃）の早い時期の遺跡から既にウシの骨が出土している。田畑を耕す労働力としての利用も始まる一方で、古代中国の殷では神に捧げる最高の生け贄だった。ヒンドゥー社会でもウシは神聖な動物で、こちらでも崇拝の対象になっている。人々は飢饉になっても決して牛肉を食することはない。牛を殺すのはバラモン僧を殺すことと同等の罪であるとされたからである。世界各地の影絵人形は細工の容易さから牛皮でつくられることがほとんどだが、インドでは代替品としてヤギの皮を用いたりもする。古代エジプトにはアピスという聖牛まで存在した。アピスは聖牛にふさわしく、「眉間に三角の白い斑点」「背中に有翼日輪の模様」があるなど、実に 29 もの特徴を持つ牡牛である。これらの特徴をすべて兼ね備えた牡牛など、とても存在したとは思えないが、古代ギリシアの歴史家ヘロドトスによると「（アピスは）きわめて長い間隔をおいてしか出現しない神で、あらわれたときはエジプトの全国民が歓喜して祝った」（『歴史』第３巻 27 節）そうである。生きている間は神殿で手厚く保護され、死ぬとミイラにされて王並みの豪華な葬儀が営まれ、さらに国全体が喪に服したというから世界一幸せな牛である。

図３　棺の底板「聖牛　アピス」
エジプト　紀元前７世紀 - 紀元前４世紀頃　長 22.5cm

むかしむかし神様が動物たちに招集をかけたとき、真面目なウシは一番早く出発するが、要領のいいネズミがウシの頭に乗ってゴール前で飛び降りたために結果的にネズミが一番で到着。結局ウシは干支でトップになれませんでした、とは中国の故事である。この件でネズミにだまされて干支に入れなかったネコが、それ以来ネズミを追いかけ回すようになったのだと故事では続くが、ウシがネズミをその後も恨んだとは書かれていない。ウシは度量が広い。干支では中国で尊重されるトラより前に位置することからも、ウシが多方面で重要視されていることが窺える。広い大きな心でゆったりと対処し、しかし早めの準備で備えるというウシを範とした丑年にしたいものである。

図４　十二支文の鏡「亀紐鳳凰十二支文鏡」
重要美術品　中国　唐　7-8 世紀頃　径 12.6cm

〈図はすべて天理参考館蔵品〉

# 「碍」の字表記問題再考（11）

おやさと研究所嘱託研究員
天理大学非常勤講師
八木　三郎　*Saburo Yagi*

本連載において「障碍者」の表記を縷々検証してきたが、今回はさまざまな絵巻物や歴史的文書に登場する障害者像を紹介したい。

**絵巻物にみる障害者像**

平安、鎌倉時代の文書のなかに絵を主体にして情景を描写する「絵巻物」が数多く残されている。その一つである「病草紙（やまいのそうし）」には、今でいう「脊椎カリエス」「白内障」「統合失調症」などの様々な疾病や障害が描かれている。なかには、現在わが国の国民病ともいわれる「糖尿病」までが描かれているのには驚くばかりである。この絵巻物を見る限り、現代社会特有といわれる生活習慣病も実は遠い昔から存在し、人々の憂いになっていることが「病草紙」から読み取れる。

絵巻物に多く登場するのが「躄車（いざりぐるま）」である。「躄」という言葉は、現在では不適当用語として扱われ、記述を目にすることはない。しかし、過去には肢体不自由の歩行困難な状態を表す言葉として使われていたのである。

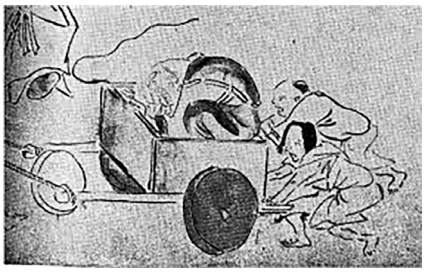

図１　年中行事絵巻「躄車」（椙山女学園大学所蔵）

躄車は車いすともいうべきだろうか。今の時代であれば、歩行困難を補助する器具が種々用意されているが、遠い昔では自ら歩行できなければ、生活上での移動でかなり困難を極めたことは想像に難くない。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』では、一日に30㎞から40㎞歩くと書かれているが、旅の「絵巻物」のなかにも躄車が多く登場している。そのなか、四国八十八カ所の札所を巡礼する「お遍路」でも躄車の記録が残っている。

図２　お遍路の躄車（椙山女学園大学所蔵）

四国の伊予、讃岐、土佐の地域では遍路のことを「へんど」というのが一般的だという。漢字では「辺土」と表し、四国内の辺地を巡礼するという意味からへんどと言うらしい。このへんどには、「よたてへんど」「おげへんど」「いざりへんど」などがある。よたてへんどは巡礼を生業とする人を意味し、おげへんどとは、遍路をよそおって人々の同情をかう別名、だましへんどをいう。いざりへんどは、歩行困難な者が躄車を使って遍路を行うことを意味する。村や街道筋の人々はこの躄車を見つけると近くの人を呼び、村境まで押して行ったといわれている。それが自らの功徳になると考えられていた。

**歴史上の人物**

265年間の江戸時代において、障害があったと推測される徳川将軍が２人いる。それは、第９代将軍・徳川家重と第13代将軍・徳川家定である。

徳川家重は、正徳元年（1711）に第８代将軍・徳川吉宗の長子として誕生している。江戸幕府の公式史書である『徳川実紀』によれば、家重は生まれながらにして虚弱であり、言語が不明瞭であったと記されている。そのため、周囲の者は理解することができず、側近の間では将軍の継嗣として不適格とみなされ、廃嫡の話まで出ていたようである。しかし、将軍継承は才能云々ではなく、「現将軍の長子が継承する」という吉宗の思いにより、長男である家重が第９代将軍として受け継いだのである。

次に、第13代将軍の徳川家定は文政７年（1824）に第12代将軍・徳川家慶の４男として誕生している。この家定も幼少の頃より病弱と記録されている。加えて、人前に出ることを極端に嫌ったと記されている。父である第12代将軍・家慶は家定の器量を心配し、後の第15代将軍になった徳川慶喜を家慶の継嗣にまで考えていたという。しかし、老中などの反対により家定を将軍継嗣としている。

この家定が第13代将軍となったのは、嘉永６年（1853）の「黒船来航」の時である。マシュー・ペリーがアメリカ大統領の親書を渡すことを目的に浦賀（横須賀）に黒船で来航し、それを契機に徳川幕府は鎖国から開国に歩み始めた。翌年、日米和親条約締結以降に初代駐日公使としてタウンゼント・ハリスがわが国に駐留している。そのハリスが記した『日本在日記』のなかに将軍・徳川家定に謁見した様子が残されている。ハリスが家定に挨拶を述べた後に、家定が次のように答えたと書かれている。

> 遠方の国から、使節をもって送られた書簡に満足する。同じく、使節の口上に満足する。両国の交際は、永久につづくであろう。

この時、家定は床から２尺ほど高くなった所に設けられた椅子にこし掛け、その前には天井より簾がかかっていて、家定の姿を見ることができなかったと記されている。しかし、簾越しに見える家定について、ハリスは次のように書き残している。

> 大君は自分の頭を、その左肩をこえて、後方へぐいっと反らしはじめた。同時に右足をふみ鳴らした。これが三、四回くりかえされた。それから彼は、よく聞こえる、気持ちのよい、しっかりした声であった。

この家定の言葉を発するときの身体反応、様子から脳性麻痺であると考えられる。

江戸時代に登場する障害者像は上述するほかにも数多く存在する。なかでも、高名な盲人の国学者として知られているのが塙保己一（はなわほきいち）である。塙は海外にも名を馳せ、三重苦で知られるヘレン・ケラー女史の自叙伝にも登場している。ヘレン・ケラーは「私は子どもの頃、母から塙先生をお手本にしなさいと励まされて育ちました。今日、先生の像に触れることができたことは、日本訪問における最も有意義なことと思います。」と昭和12年（1937年）にわが国に来日したときに、塙の銅像に触れながら挨拶のなかで語っているのである。

［引用・参考資料］

坂田精一訳『ハリス日本滞在記』（下）、岩波書店、1954年。
堺正一『塙保己一とともに―ヘレン・ケラーと塙保己一』はる書房、2005年。
多氣千恵子『巡礼と遍路』香川県立図書館、2006年。

# 第3講：88「危ないところを」

天理大学人間学部教授
おやさと研究所研究員
岡田　正彦　*Masahiko Okada*

今回の講座は、次の逸話をもとに信仰体験の意義について考えました。

**八八　危ないところを**

明治十四年晩秋のこと。土佐卯之助は、北海道奥尻島での海難を救けて頂いたお礼に、船が大阪の港に錨を下ろしたその日、おぢばへ帰って来た。そして、かんろだいの前に参拝して、親神様にお礼申し上げると共に、今後の決心をお誓いした。

嬉しさの余り、お屋敷で先輩の人々に、その時の様子を詳しく話していると、その話に耳を傾けていたある先輩が、話をさえ切って、おい、それは何月何日の何時頃のことではないか。と言った。日を数えてみると、全く遭難の当日を言いあてられたのであった。その先輩の話によると、

「その日、教祖は、お居間の北向きの障子を開けられ、おつとめの扇を開いてお立ちになり、北の方に向かって、しばらく、

『オーイ、オーイ。』

と、誰かをお招きになっていた。それで、不思議なこともあるものだ、と思っていたが、今の話を聞くと、成る程と合点が行った。」とのことである。

これを聞いて、土佐は、深く感激し、たまらなくなって、教祖の御前に参上して、「ない命をお救け下さいまして、有難うございました。」と、畳に額をすり付けて、お礼申し上げた。その声は、打ちふるえ、目は涙にかすんで、教祖のお顔もよくは拝めないくらいであった。その時、教祖は、

「危ないところを、連れて帰ったで。」

と、やさしい声でねぎらいのお言葉を下された。この時、土佐は、長年の船乗り稼業と手を切って、いよいよたすけ一条に進ませて頂こうと、心を定めたのである。

＊

この逸話に登場する「土佐卯之助」（敬称略）は、撫養大教会の初代会長であり、天理教の歴史において大きな役割を果たした人物の一人です。

幼い頃に父を亡くした卯之助は、若くして北前船に乗り込み、人一倍の苦労を重ねて一人前の船乗りになります。その後、明治11年、24歳の時に結婚し、土佐家の婿養子になりました。しかし同年、結婚してすぐに北海道へ向けて出帆した卯之助は、帰阪後に心臓脚気の病に倒れます。この病をたすけられたことが、卯之助の入信のきっかけになりました。

翌明治12年の秋、航海を終えた卯之助は、一年越しの願いを叶えて「おぢば」へ帰りました。このとき「救けて頂いた恩を返したければ人を救けよ」と諭された言葉に感銘を受けて、熱心な布教活動を始めます。翌明治13年の航海の際には、北海道に滞在している間に「にをいがけ・おたすけ」に奔走し、北海道布教の先駆けとなりました。

続く明治14年、卯之助は新造船に乗り込み再び北海道へ向かいます。撫養港で初めてと言われた1,300石の大船の実質的な責任者（副船頭）として、店の命運のかかった大事な航海を取り仕切る最中に、卯之助は海難に出合うことになるのです。

＊

幕末から明治前期にかけて、北前船の交易は全盛期を迎え、大阪から北海道へは塩や酒・たばこなどの嗜好品(撫養港からは藍玉)が運ばれ、北海道からはニシンや数の子、昆布などの特産品が運ばれました。撫養港から出帆した帆船は、瀬戸内海を抜けて日本海を北上し、主要な港に寄港しながら北海道へ積荷を届けました。春に出帆した北前船が、「下り」と「上り」の積み荷を入れ替えて戻ってくるのは、秋も深まる頃になります。長期間に及ぶ過酷な航海ですが、これらの交易は莫大な利益を生みました。

この大切な積み荷を一杯に積んだ船が、座礁しかけたのです。濃霧のなかで一度は沈没を覚悟しますが、風向きが変わって難を逃れた船は何とか目的地に到着し、卯之助は大切な船と積み荷を守ることができました。その後、北海道で積荷の入れ替えと商いを終え、帰阪した卯之助は「上り」の積荷を降ろして、すぐに「おぢば」へ帰ります。そして、航海の顛末を語っている最中に、ふいに遭難の日時を言い当てられたのです。しかし、この遭難の危機は「下り」の航海の途上の出来事です。この逸話の日までには、少なくとも半年ほどのタイムラグがありました。

＊

遭難の日、教祖は「お居間の北向きの障子を開けられ、おつとめの扇を開いてお立ちになり、北の方に向かって、しばらく、『オーイ、オーイ。』と、誰かをお招きになっていた」と伝えられています。それを見ていた人が「不思議なこともあるものだ」と思い、日付や時間を記憶していたのですから、よほど神々しいお姿だったのでしょう。

風向きが変わって船がたすかったのは、決して偶然ではなかったのです。少なくともこの話を聞いて、卯之助はそう確信したのではないでしょうか。大難を小難に導かれた暖かい親心に触れて、卯之助は「声は、打ちふるえ、目は涙にかすんで、教祖のお顔もよくは拝めない」ほど感激しました。そして、生涯をこの道に捧げる決意をかためます。

入信の理由は突然の病をたすけられたことでしたが、お礼のために訪れた「おぢば」で布教の動機を与えられて「にをいがけ・おたすけ」に奔走するようになり、この逸話の出来事を契機として、卯之助は腕の良い船乗りとして一目置かれていた人生を捨てて、布教専従の道を歩み始めることになるのです。

とはいえ、人生には紆余曲折がつきものです。残された記録をたどる限り、土佐卯之助の布教人生は苦労の連続でした。しかし、このときの信仰的な感激が、どのような状況においても彼の心を支えてくれたのではないでしょうか。

＊

人生の最大の難問の一つは、一瞬先の未来です。卯之助が航海を進めた江差沖の海のように、先の見えない濃い霧のなかで、手探りで歩みを進める以外にほかの行路はありません。たとえ、この道の信仰をもとに新たな人生を生きると決意したとしても、一寸先も見通すことができない状況は同じです。

しかし、どのような場面においても親神様のご守護に感謝し、教祖の導きの手を感じて歩む人生は、人生の質においてまったく違うものになるでしょう。たとえ未来を見通すことはできなくても、そこに不安や不足はありません。

土佐卯之助の布教人生は、外面的には苦難の連続でした。しかし、教祖の教えを羅針盤とし、親神様の自由自在のお働きを追い風として進む人生の航路は、内面的には順風満帆だったのではないでしょうか。たぶん、この逸話に残る信仰の「元一日」の感激が、いつも彼を支えてくれたはずです。だからこそ、撫養の道は大きく広がったのだと思います。

# 天理大学おやさと研究所
# 2020 年度公開教学講座

## 信仰に生きる　『逸話篇』に学ぶ（６）

本年度の公開教学講座はオンラインでの開催となりました。
第５回目の配信は２月１日～同月末です。

おやさと研究所のホームページより申込みのうえ、ご試聴いただけます。

第５回（２月）：
　八木三郎研究員
　106「蔭膳」
第６回（３月）：
　堀内みどり主任
　103「間違いの
　　ないように」

# 天理大学おやさと研究所
# 2020 年度「教学と現代」
## 「新型コロナウイルス時代の天理教の教えと実践」

　世界的な感染拡大となった新型コロナウイルス COVID-19 は、私たちの暮らしを大きく変えました。マスク着用や「三密」の回避、また「新しい生活様式」の推奨など、これまでの生き方・暮らし方が根本から問い直されています。
　さらに、信仰者にとっては、おぢばや所属教会に参拝できないもどかしさを感じています。私たちはこのコロナ禍の中にあって、これまで当たり前だと思っていたことが、実は決してそうではなかったという気づきを得ました。
　天理大学では 2020 年８月、ラグビー部寮での集団感染が起こり、またそれによって、心無い非難や差別も経験しました。しかし、この大きな節を“一手一つ”で乗り越えることができました。そこから見えてきた“一れつきょうだい”の教えについて、天理大学長でもある永尾教昭所長が、天理大学の事例を通じて基調講演をいたします。
　続いて、佐藤孝則研究員が生物科学的な視座から、また澤井義次研究員が天理教学の立場から、それぞれ新型コロナウイルスの感染拡大をどう受け止め、コロナ禍の中でどう行動したら良いのかについて発題をいたします。

【日時】2021 年３月 28 日（日曜日）
　　13 時 30 分～ 15 時 00 分
【開催方法】　オンライン

【講師・演題】
基調講演：永尾教昭所長
「一れつきょうだいの教え－天理大学の事例をもとに－」

発題１：佐藤孝則研究員
「新型コロナウイルスの特性から考える」

発題２：澤井義次研究員
「『世界は鏡』のコスモロジーから考える」

今回の「教学と現代」は、オンライン形式で行います。
（おやさと研究所のホームページから事前登録をお願いいたします。）


グローカル天理
第 22 巻　第２号　（通巻 254 号）
2021 年（令和３年）２月１日発行



ⓒ Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University



発行者　永尾教昭
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan